

差異の工学
—— 民族の構築学への素描 ——

福 島 真 人*

**On the Technology of Difference:
Outline of a Theory of Ethnicity Construction**

FUKUSHIMA Masato*

This paper attempts to reconcile the two different tendencies in the study of ethnicity in terms of objective and subjective approach. The bifurcation of the argument into these two aspects derives from the processual nature of ethnicity construction, which is to be analysed in view of how a certain difference among other differences is picked up and is activated so that the hypothetical 'ethnicity' is materialised or reified through the process of what I call the 'hypercycle of difference' according to Eigen's biochemical process of autocatalysis.

I はじめに

現在に至るまで、様々な分野で膨大な量の民族、あるいはエスニシティ論なるものがあきもせず蓄積されている [cf. Barth 1969; Glaser and Moynihan 1975; Banks 1996]。その蓄積ぶりや論点の拡散ぶりをみると、この問題に関する人々の関心の度合いと同時に、問題設定自体の曖昧さ、議論構成の混乱さえ感じ取れる。こうした雑然たる民族論を一瞥すると、この手の議論が必ずといっていいほど陥るある種の論理上の形式的対立がここにもあるという事が段々と分かってくるのである。

社会学的な分析単位を構成する概念、例えば階級あるいはジェンダーといったそれは、しばしば同型の論争に巻き込まれる傾向がある。つまりその単位をある種客観的なものと同定する立場と、それを当該関係主体の主観的な構成体として考える立場への、理論的な分岐である。例えば階級を定義する場合、特定の客観的な弁別規準によってその存在を記述する仕方に対して、階級理論の展開の早い段階で、それに対するアンチテーゼとして階級の分析には、その参

* 国際大学グローバルコミュニケーションセンター； Center for Global Communication, International University, 6-15-21, Roppongi, Minato-ku, Tokyo 106-0032, Japan

加当事者の階級「意識」なるものが必然的に要請されるという立場が、すでに提出されてきた。そして階級理論の関係者達は、この二つの極をどのように調停すべきかについて、長い論争を繰り返してきたのである。¹⁾

民族の概念についても同じような現象が観察される。つまり民族というものを何か実体的な弁別特性によって区分しようとする試みと、それに対する主観主義的なアンチテーゼである。実体論者達は、当然のことながら、民族を弁別する単位を求めて、言語、宗教、その他の要素をピックアップしては、それによりこの地域には幾つの民族集団があるといった議論を展開する。これは、階級がそれが基づく何かの中心的な基本原理（例えば生産手段の専有から始まって、最終的には収入や財の統計的な位置に至るまでの）に還元されるのと同じような発想であるが、こうした分類作業は、それを行えば行うほど基準が多岐に亘り、混乱を増していく。例えば言語という単位一つとっても、何を以て独立した〇〇語とよび、他をある特定言語の地方的な変種としてとらえるかというのは、全く曖昧に見える。例えばノルウェー語とスウェーデン語の差異と、日本国内に於ける、東京弁と琉球方言の差異を比較すれば、その問題点は直ぐに分かるだろう。実際こうした設定の恣意性については既に多くの議論がなされているし、その背景に様々な歴史的・政治的な操作が作用しているという点も、もはやルーティーンと言える程に指摘されている。

こうした民族の弁別の客観的な基準を放棄する人々は、その代案として一種の主観主義的なアプローチを持って来る。つまりいわゆるエスニック・アイデンティティという概念である。これは周知の通り、その当事者が自らを定義するあり方をもって、前述した客観主義的な基準にかえるというものであり、このアイデンティティ論も既に多くの蓄積がある。だがこのタイプの議論では、こうしたアイデンティティ意識が如何に状況依存적であるかといった指摘が繰り返され、その意味でもエスニシティという概念が、曖昧である事が強調される。つまり文脈に応じて、自分はタイであったり、ラオであったり、ルオであったりするといった話が仰々しく語られ、²⁾ 何かそこに深遠な謎でもあるかの如き議論がなされるのである。しかしこの指摘も、そもそもアイデンティティという概念を持ち出した時点から、既に構造的に内在していたものである。つまりこの概念を組織的に定式化したエリクソンの例を持ち出す迄もなく、アイデンティティとは、社会的な対他関係の中で存在するものであって、なにか固定的な心理的な

1) こうした実在論的な階級論に対する、当事者の意識の重要性については、はやくはルカーチの議論があり、以降、様々な形で議論の蓄積がある [Lukačs 1971; cf. Hall et al. 1984; Wilkes 1990; Žižek 1994]。日本の階級あるいは階層を扱う社会学的な議論でも、それを客観的な指標に基くとするか、それとも人々の階級(階層)意識によって分類するのか、というのは常に争点になってきた。

2) 東南アジアでは例えば、Moermanの古典的な研究 [1965] がその例である。林らの主催する研究会でもこの手の議論は散々繰り返された。

状態を示すものではない。³⁾ だからそれが状況依存的なのは、いわばアイデンティティの定義の中に既に明示的に含まれているものであり、何も不思議はないわけである。我々自身ですら、自分が日本人であるか、東京都民であるか、あるいは豊島区民であるといった弁別は、それが問題にされる文脈による訳であり、相手が外国人であるか、千葉県民であるか、あるいは板橋区民であるかによって、その時その時に必要な弁別が要請されるというだけのことなのである。

そうだとすればエスニック・アイデンティティの問題というのは、一種の疑似問題という事になる。しかしこの問題関係者がそれでも納得しないのは、この民族という概念が、例えば様々な民族紛争といった形で、緊急の問題として感じられる場合が多いのに、何故か豊島区民の問題はそうした民族問題とはならないという点なのである。だがこれを理解する為には、もう一度振り返って、問題に対して、より形式的なアプローチをとる必要がある。

II 差異と文脈

我々の間である二人の人間を抽出したと考えると、二人を記述する際に、殆ど無限とっていい差異の構造がある事に気づく。例えば男／女、出身地域の違い(日本／外国、関西／関東、豊島区／板橋区、都市／農村その他)、身長、宗教の差、言葉、服装、年齢、収入、就職先、クレッチマーの三類型に見られるような身体形質の差、血液型、出身学校等々、ほとんどボルヘスの中国の犬の分類法と同じように、それらの差異を記述する弁別特性はいくらでもみつけ出すことが出来る。そしてある特性の記述では同じ範疇に属する人達も、その範疇の中で更に細かい差異に分割することが出来る。アイデンティティとは、この無限に存在する弁別特性を、その文脈において活用する、その活用の仕方に他ならない。だから原理的に、それは弁別される対象との関係によって活用のされかたが異なる訳であり、例えば官僚制や会社の中で出身大学による弁別が固有の意味を持つ場合や、あるいは年齢の差というものが何か共通の世代経験を示すといった形で意味を持つ場合等々、何がどう利用されるかというのは、全く文脈によるのである。

そこで我々がどの差異を選択し、そのうちどれを特に重要な差異として認識するかというのは、全く状況に依存する事になる。例えば地理的な特性だけをとっても、私は東京都豊島区長崎という場所に住んでいるが、そのそれぞれの弁別特性が私自身にとって意識化されるのは、

3) より正確に言えば、エリクソン流のアイデンティティ論とは、それが安定的に定義出来なくなった状態、特に急激な社会変動によって、自らの帰属性が自覚的に意識されざるを得なくなると同時に、それが不安定になって病理的な状態を形成する場合に、問題構成されるものである [cf. Erikson 1959; 1963]。その意味では、エリクソンのアイデンティティ論自体が、この論文の差異のハイパーサイクル論と密接な関係があるという事ができるかもしれない。

特有な文脈が関わってくる時である。例えば私が東京都民である事を意識化させられるのは、関西の研究会に出掛けて行って、関西弁とねっとりとした人間関係に晒される時であろう。だがそうした東京性の自覚は、大抵一過性であり、東京に戻ってきてしまえば消失する類のものである。豊島区民としての自覚はもっと怪しい。それが意識されるのは、例えば板橋の図書館にでも出掛けて行って、自分が豊島区民だからここでは本は借りられないという事が分かった時くらいであろうか。長崎となれば、殆どそれが自覚される機会はないとっていい。勿論長崎商店街か何かに参加し、地区対抗の芸能大会にでも出席していれば話は別であるが、参加していない者は勿論の事、参加している人達ですら、そうしたイベントでもない限り、その差異が自覚的に認識されるという事はまずないだろう。

我々の日常的な行為連関の中では、様々な特性が差異の瞬時に知覚されては、次の状況によってまた別の差異に置き換わるという過程が連続的に経験されている。この差異の知覚は状況依存的である為、状況の変化によってそれらは置き換えられ、通常、その差異の知覚と、それによって生じるアイデンティティの認識は、局所的、時間拘束的である。そしてこれがいわば差異の知覚が働く最も標準的な形式である。

そこでこれを通時間的に見れば、我々は自らの多種多様な弁別基準を色々な形で経験しては、次の差異の構造に置き換えるという経験を日常的にしている事になり、その内容が、東京性、男性性、自らの出身大学、身体的特性、あるいは自らの服装の特性といった相互に無関係な特性を連続的に経験するという事であってもなんら不思議ではない。むしろそれが一般的な形式である。

だがこのようにそれぞれの差異が機能的に等価の形で、時間軸にそって目まぐるしくたちかわる形で経験されていけば、何の社会的な問題も起きないのだが、現実にはこの無限の差異は、その全てが等価的に経験される訳ではない。これが民族問題なるものを考える際のひとつのポイントであり、社会学的にみて意味ある、問題構成としての差異の形成という現象を解明する事がここで要請されるのである。

前述したように、我々は自らと他者の間に無限ともいえるような差異を、原理的には抽出する事ができる。そしてそれらの差異の多くは文脈に依存する形で経験されては、次の差異の知覚にバトンタッチされるものであると述べてきた。だが我々が民族という概念について語る時には、そこにある種の実在化の傾向がある事を指摘した。本来差異とは、それが文脈において多様に経験されるものであるにも関わらず、民族というものは何か実在的なものであると考える傾向に、人々は陥りやすいというのである。それは必ずしも学者の謬見であるというよりは、しばしば民族紛争なるもので沸き立っている当事者にとっても、その文脈を越えて実体化するような傾向性を見せるのであり、ここでの疑問は、それは一体何故なのかという事である。と同時に、例えば同じ様な差異の構造が、ある地域では越えがたいものとして、あらゆる

知覚を支配するようになる一方で、別の場合にはそれらが、前述したような単なる状況依存的なそれとして知覚されるに過ぎないという、この違いは何処からくるのであろうか。

例えば宗教的な差異はしばしば政治的な紛争の原因であるかのように語られるが、少し調べれば分かるように、それは真実ではない。確かに世界の紛争地域では宗教的なそれが原因で紛争が起こっていると考えられている地域が多く存在するが、そうした紛争が起こらない場合も多く、異なる宗派が共存しているという場合も少なくない。更に同じ宗教の内部ですら、教義の差が長い闘争を巻き起こしたりするケースも存在する。例えば、僧衣を片肩に掛けるのか、それとも両肩にかけるのかで対立したビルマの上座部仏教のようなケースもある。この事は、特定の差異が必ず政治的な対立を呼ぶという訳ではないという事を如実に示している。より卑近な例で言えば、例えば関東と関西の差異というのは、マスコミに時々登場する恰好の話題であり、それを見るかぎりでは、まるでこれは二つの異なった民族のようなものに聞こえてくる。だがそれでも関西人が独立して、独自の国を構成するという話は聞かない。しかし北イタリアのロンバルディア同盟では、平然と独立が語られたりするのである。こうした例を見ても分かるように、ここで問題になるのは、ある特定の差異の特長ではなく、それがあつた種の歴史的な状況に於いて政治、軍事的な対立を引き起こすようになる、そのメカニズムなのである。

Ⅲ 差異の問題構成——X区民の民族自決

ここでは、その差異の問題構成の過程についての仮説を、一つのフィクショナルな話に基づいて、説明してみようと思う。それはX区民がY区民との民族対立を通じて、独自のアイデンティティを構築するに至るという架空の物語である。何故ここで架空のX区民を登場させたかと言えば、彼らが現実的にはこうした民族自決に至る可能性が殆どないと感じられるからである。もしどこかの具体的な少数民族や宗教集団を一つのモデルとしてとると、そこに働くメカニズムは、あたかも彼らの少数民族としての特性、あるいは彼らの宗教の特性によるものとして誤認されやすい。だからこうした思考法こそ、民族という概念に我々が呪縛される一つの原因なのである。そこでここでは、内容が殆どないX区民という概念を仮説的に持ち出す事によって、原理的には状況依存的である差異の知覚が、何故実体的な民族概念を産出する羽目になるのかを説明しようとするのである。

さて前節でも主張したように、我々と他者を区別する差異は無限に存在し、通常我々はそれらの差異を状況別に知覚しては、次なる差異の知覚に置き換えるという作業を日常的に行っている。そして何とか区民間の弁別は、図書館の貸出位の時にしか、問題にならないという事をすでに示した。だがそうだとすれば、その差異が何らかの理由によって、ただの差異ではないそれとして抽出され、いわば問題構成化されるという過程がここで是非とも必要となる。ここ

が我々のフィクションの出発点である。

20××年、東京都下、隣接するX区とY区の間で、ちょっとした事件が起こった。都で最大のゴミ処理工場をこの両区境界に跨がる巨大な敷地に建設しようという計画が持ち上がったのである。このゴミ処理工場の建築に関しては、地元の住民だけでなく、区議会でも反対の声が上がっていたが、その態度はかなり異なっていた。というのもゴミ処理に関しては、近年東京ではある計画が持ち上がり、それによると処理の地域を四つのブロックにわけ、それぞれのゴミはそれぞれのブロック内で原則的に処理するという事になっていたのである。そしてY区は第一ブロック、X区は第二ブロックに所属するはずであった。実はこの処理工場は第一ブロックのゴミを処理するという計画だった為、Y区側、特に区議会は、それが自分達の所属するブロックのゴミを処理するという点からも、ややあいまいな態度を取らざるをえなかった。しかしX区側では、そのゴミ処理場は自分達のブロックとは何の関係もない為に、反対が相当エスカレートしていた。

本来ならば、そのゴミ処理場に隣接した住民達は、一致団結して反対運動を展開すべきだった。しかしこうした思惑の違いから、その反対運動に関しては、両者の中で、最初から立場の違いがあった。更に状況を悪化させたのは、制度的にY区側が都からゴミ処理関係の助成金を貰えるようになっていたという点である。この為Y区側の住民は、何回かの折衝の内に、反対運動の矛先を鈍らせるように要請されていた。

この事がX区民側に知れ渡ると、X区側の隣接住民達は態度を硬化させた。本来なら協力して反対運動を展開すべきなのに、Y区民側があたかもその運動を裏切るような態度を取りはじめた事に対する憤激、そしてその工場が実はY区関係のゴミを焼却する為のもの（その事は、X区側は最初よく理解していなかった）であるのに、X区住民がそれに巻き込まれるのは何事だ、という両方の感情が一気に高まってきたのである。X区民側で開かれた住民集会では、この工場建設に対して、それはY区のどこか別の所で建てられるべきで、X区と隣接するこうした地域で建てられるのはおかしい、そもそもこれはY区の連中の責任である、Y区と都側はゲルだ、という興奮した意見が飛び出すようになった。この住民集会に参加していた行政側は、本来ならば住民を説得する側に立つ筈であったが、妙にこのY区批判に同調するような傾向を示しはじめた。というのも、行政側は行政側で、Y区との間には幾つかの係争事項を抱えていたからである。例えば両区の間を流れる川に掛かる橋の修復費用を巡っては、それをどちらが拠出するかで長いこともめていて、行政的には決着がつかない膠着状態が続いていた。これに類する問題がいくつかあり、X区とY区はその行政レベルでも何となくぎくしゃくした関係が続いていたのである。更に問題を悪化させたのは、こうした対立に、区長間の個人的な対立が加わった事である。X区長とY区長は、両者とも都下では将来を嘱望された政治家であった

が、お互いに仲が悪いのでも有名であった。X区の区長は急進的な政治スタイルで精力的に区の仕事を行うと同時に、あちこちで住民集会に参加しては、住民の自治の重要性を訴えるような、学生運動の延長のようなスタイルで政治を行っていた。一方Y区長は、そうしたX区長のスタイルを内心苦々しく思っている長老タイプであり、長いこと区政に携わっている者の目からいうと、X区長のスタイルは煽動的で、区の政治には相応しくないと考えてきた。そうしたスタイルの差もあってか、本来ならそれほどめめない両区間のトラブルも中々解決が出来ないという事態に陥りはじめ、潜在的な緊張関係が高まってきていたのである。

こうした背景に加え、両者の関係が急速に悪化したきっかけを作ったのは、ゴミ処理場問題を話し合う為の隣接住民集会である。この集会は最初からかなり険悪な雰囲気スタートした。というのもX区民側は、Y区民や区長に対する不信の念をつのらせており、相手側の煮え切らない態度に対して、批判的な姿勢を強めていたからである。集会はY区側の司会で始まったが、直ぐに怒号と野次で混乱状態に陥った。Y区側が喋ろうとするとX区側の住民はY区側の、都との癒着を責め、それに対してY区側も応酬するという形で、集会は収拾がつかなくなった。興奮した若者がY区住民の指導者に詰め寄ると、それを守ろうとして、Y区側の若者との間の小競り合いが起こり、しまいには胸ぐらを掴みあって殴り合いになりそうになった。そうした混乱状態のままで、集会は何一つ決定できず終わり、双方に決定的な不信感が残った。特にX区側は、このままではこのゴミ処理工場建設は阻止できない、そしてその背景にいるのはY区一派であるという確信を強めるようになった。そこでX区の反対住民、特に若手のグループは、直接Y区の行政当局者に会って談判しようと、Y区区役所に押しかけていった。だが門番に押し止められた一行は、その制止を振り切って、「区長に会わせろ」と怒鳴りつつ区長室に押しかけていったのである。Y区長は、こんな直接抗議を、しかも他の区の間から受けたことがないので、彼らをなだめるところか、すっかり激高してしまった。ゴミ工場ぐらいでがたがた言うな、と区長は一喝し、それを聞いたX区の住民達は、都の回し者と、口々に叫びながら、区長室をめっちゃめっちゃにして、ついには区役所の警備員と駆けつけた警察官に実力で排除される始末となった。

X区側は、問題を重視した区長が、早速行動を起こしたX区の抗議行動者との集会を行い、あなたがたのやった事は十分に理解できる、というサポートを与えつつ、一応彼らの暴力行為を非難してみせた。しかしこのサポート発言がY区側に伝わると、区長だけではなく、区議会でもこうしたX区長の軽率な発言に対しての批判が高まった。そもそもY区議会でも、このゴミ処理工場の問題では意見の対立があった。しかしそれが前代未聞の、区役所乱入という事態に直面して、区議会は一様にX区の住民批判を打ち出し、そしてそれを影で支援する（と彼らの目には映った）X区長に対して、Y区に対する公式謝罪、さらにX区と係争中の問題の無期限凍結を打ち出して、圧倒的多数で可決されたのである。だがこうしたY区側の批判の高まり

に対して、X区長は全く動じなかった。それどころかむしろ、X区抗議団に対するY区長の「不誠実」な態度を公然と批判し、問題の解決を遅らせているのは、ひとえにY区側の、都との癒着にこそ問題がある、と発言したのである。

こうした非難の応酬は、当然マスコミの注目するところとなった。特にX区住民の区役所乱入事件は、マスコミでもかなり大きく取り上げられ、ゴミ処理工場とは無縁のY区の住民達も、めちゃくちゃにされたY区長の執務室や、X区長のY区批判発言等をマスコミを通じて知ることになったのである。当然Y区民の間での反応も大きくなった。X区とY区が境界を接する地区では、町内会等で共同の催しをすることでいくつかがあったが、ゴミ処理工場からはかなり離れた地区でも、このゴミ処理場問題に由来する対立や、両者の一連の発言等が取り上げられ、この問題について話題が及ぶと、ゴミ処理工場とは関係ない地区でも、両者の関係はしばしば気まずいものになった。

マスコミは面白がってこの両者間の対立をしばしば取り上げるようになったが、次に関係者を騒がしたのは、Y区長が地元住民との集会で、X区民を「都の二級区民」とこき下ろしたというものであった。要するに、Y区のYという言葉は、江戸初期から代々使われている由緒正しい地名であり、区内にもそうした区の歴史を示す遺産が多数残っている、それに比べれば、X区なんてのは、もともとY区の一部だったのが、あとで分離したもので、あそこは田舎から集まってきた連中がつくった区だ、伝統も糞もありゃしないんだと咆哮したというのである。この発言は居合わせた写真週刊誌の記者に取り上げられ、「二級区民よ、引っ込め」の見出しで、記事になってしまった。さすがにY区長はその発言を、マスコミがでっち上げたものと否定したが、X区役所は敏感に反応した。X区役所の歴史資料係は、Y区長の発言を公式に批判し、X区のXという語は遠く鎌倉時代に遡る起源を持つ語であり、X区に残存するその史跡等を引き合いに出して、X区の方が実は由緒正しいのだ、Y区長の発言は根拠がないとやり返した。X区長もY区長に公式に謝罪を要求する事態となった。

この「二級区民」発言は、写真週刊誌で報じられたために、人口に膾炙する事になったが、妙なところに飛び火する事になった。Y区側の小学校でX区側から来ている生徒が、「二級区民」「田舎者」といっていじめられるというケースが出てきたのである。X区とY区はかなりの部分が川で区切られているが、普段は別にそこが区の境と意識する事もなかった。ところがある小学校で、川向こうの田舎者、とX区出身の生徒をY区の生徒がいじめるといふ遊びが流行りだし、それがあつというまに広まってしまったのである。最初はただからかったり、追い回したりするだけだったが、急速に陰険化し、しまいには不良少年達が、夕暮れ時に道行く子を捕まえて、それがX区出身と分かたら、田舎者といって殴りつけたり、X区の名を平仮名で顔等に塗りとくるといった事件まで発生した。これは「X狩り」と子供達の間で呼ばれ、子供達は自分の身分証明書のようなものを絶対に隠すようになった。しかしそれでも一部の子

は既に川の向こう側の奴、とって顔が知られており、そうした子は怖がって学校に行かなくなったり、橋を渡って向こう側に出掛けるのを避けるようになってしまった。

子供達は、自衛の為に、自らの区を歩いている時は、区のマークを記したバッチをして、また方が一反対側に行く必要の時はそれを隠したり、あるいは相手の区のバッチをして偽装するといった対策をとるようになった。X区は※のようなマーク、Y区は∴というマークであったが、公務以外では誰も知らなかった、こうした区のマークがやたらと有名になり、それを模したバッチが作られると、一部で飛ぶように売れるようになった。更に例えばX区の図書館で、Y区の身分証明書を見せて本を借りようとする時、係員が慇懃無礼に、「すいませんが、Y区の方にはお貸しできません」と追っ払われるといった事態が各所に起こるようになった。こんなことをいう係員は、しばしばこれ見よがしに※のバッチをして、自分がX区の役人である事を誇示していたのである。

かくして、ゴミ処理工場の問題に端を発した両区の対立は、区政の様々な側面に亘ってエスカレートしていったが、実際両区共同の政策、例えば両区間を流れる橋の補修に対する資金の配分を巡る対立が、様々な問題で感情的にエスカレートした為に、実際に補修が不可能になり、工事が一時中断するといった事態まで発生した。その為に長期に亘って、そこを往来する車は、その橋を大きく迂回して、対岸へ行かなければならなくなったのである。また両区合同の教育委員会でも、例のいじめの問題が話し合われたが、結局両者の責任のなすり合いにおわり、これといった解決策が見いだせないままに、現場は様々な緊張感に晒される事になった。更に事態を悪化させたのは、この時期に都を襲った巨大汚職事件である。これは都知事および相当数の都庁の役人の収賄容疑が発覚したもので、都が関係したものとしては戦後最大の汚職事件に発展しそうな勢いになった。その為に都の行政機能はかなりのレベルまで麻痺してしまい、本来なら都が仲介役として発揮すべき機能が、一時的に停止してしまったのである。

対立の最も先鋭的な現場は、勿論例のゴミ処理工場の周辺である。そこではX区の反対住民を中心として、敷地のX区の部分にはテントが張られ、工場建設断固拒否の姿勢を崩さないと人々が息巻いていた。更に応援の住民や、大きく※というX区のマークの描かれた旗やバッチが、X区反対住民の団結のシンボルとして、まるで三里塚闘争のような雰囲気醸し出すようになり、しかもX区長や議会の公然たる支持もあって、警察等も事態を静観するという態度をとっていた。更にY区側の「X狩り」といった遊びの流行に対しても、X区側の人々は怒りをあらわにしていて、その年は、各所で恒例の祭りが、X区、Y区分断された形で行われただけでなく、神輿のルートが変更になったり、特に区境の近辺では、それぞれの区旗やバッチが祭りの場で使われる等、今まで見たことがなかった光景が出現していた。

更にX区では、区役所を中心として、X区シンポというものを立て続けに行い、X区が、実は都の中でも最も由緒正しい地区であり、その歴史を認識する事が今や重要です、と区長は力

説した。そして住宅の一角にある寺や庚申塚といった歴史財が新たに見直され、その歴史を掘り起こすという作業に追加予算が割かれる事になったのである。

こうしたシンポの結果である「X区の歴史」という小冊子は、従来なかった程の勢いで売れ、一部の地域では、こうした小さな史跡巡りが結構流行ったりした。そして都全体の活動でいえば、23区中、X区とY区だけが、こうした活動に異常に積極的という状態を示しており、その一年だけで自らの区関係だけの出版物やシンポに費やした予算は、他の区の数倍という規模に達したのである。

話をよりSF風にするなら、こうした闘争のエスカレートの結果、X区は独自の軍隊を徴兵して、独立宣言と同時に、Y区に宣戦布告するといった話に持っていきたいところだが、それでは余りに話が荒唐無稽になりすぎる。だがそれが荒唐無稽に感じられるのは、都下のX区という設定が、話をそこまでエスカレートさせる為の起動力に欠けるからであって、これがユーゴスラビアや南フィリピンであれば、その可能性は常にあり得るのである。だがここで示したかったのは、X区民なる概念が、殆ど存在しない状態から、ある種のマーカーとして、実体性をもつ（かもしれない）可能性を持つにいたるまでの架空のシナリオである。これは架空の話でありながら、民族という概念の動的な成立過程についての一連の仮説に基づいた寓話である。

IV 差異の工学とハイパーサイクル

日常的には殆ど意味のない差異であるX区/Y区という弁別が、ある実定性をもって、一部の住民のアイデンティティを規定するようになる、寓話的プロセスについて今まで記述してきたが、ここには差異の工学としての民族の構築過程に必要な一連の概念装置が既に含まれている。序で述べたように、民族という概念は、それが客観的な差異に基づくものなのか、それとも主観的な、いわゆるエスニック・アイデンティティといったものに規定されるのか、という議論の分岐は常に起こってきた。我々が宗教とか肌の色とかいったものを基準としてこうした議論を始めると、しばしば民族の問題は、ある種の客観的な基準に基づくものという理解に引っ張られる。しかし他方、エスニック・アイデンティティを語る論者は、それが文脈毎に多様な意味を持つという、ごく当たり前の事を指摘するだけで、何故特定の差異が他の差異よりも問題構成の前面に析出してくるかを旨く表現できないで来た。

結論から言えば、民族というのは一つの過程であり、時間軸によって歴史的に変動するプロセスである。それはある特定の差異に基づいて歴史的に構成されるが、その差異が選択される過程には、ある種の偶発性(contingency)の存在がある。つまり、ある集団と他の集団の関係

を規定する無限の差異の全てが、民族というエンティティを構成する訳ではなく、ある特定の差異が、他の差異に優越して、ある種のドミナンスを要求する様になるためには、一種の歴史的な偶然が左右するという事なのである。

それはいわば「差異のアクティベーション」とでも呼べる過程である。つまりある問題が生じたとき、その問題の原因が、数ある差異に由来するのではなく、ある特定の差異に由来するのだ、と回帰的に指摘される過程である。例えば、X区/Y区の場合、先ず問題を引き起こしたのは、ゴミ処理工場の建築というある出来事である。この出来事は、当然様々な対立関係を潜在的に引き起こす可能性をもっている。例えば、この場合、ゴミ処理工場の問題は、まずもってそれを推進する都と近隣住民の問題である。そして実際そうした形で対立が成立する事もあり得るだろうが、ここではそれが幾つかの歴史的偶然によって、区民間の対立という形に転化されるメカニズムを示してみた。この転化のメカニズムはしばしば民族問題と呼ばれる現象の根底に見いださう。ゴミ処理工場に限らず、何らかの形で人々の生活環境の悪化が引き金となってある種の紛争が勃発するというのは歴史上しばしば観察される出来事であるが、例えば経済的な対立がある種の問題構成の引き金となるというのはいずれもあり得る事である。しかしそれがマルクス主義者が期待するような「階級闘争」に発展せずに、別の差異のシステムに転化される、つまり金持ちと貧乏人との紛争が、例えばマレー系と華僑の間の対立として、いわば別の差異に写像されるというのがここでのポイントなのである。

ここで重要なのは、ある特定の差異の存在が、直ちに紛争の原因になるということはないという点なのである。つまり言語や宗教や居住の差といったものが、直ちに強固なアイデンティティの核になる訳ではないという事である。民族紛争たけなわの現場からこうした問題を遡及的に考察する場合、我々はそうした差異こそが紛争や対立の原因であるという常識に捕らわれやすい。しかしそれは、この差異のアクティベーションと、その転化のメカニズム（これを「差異間の写像」とでも呼ぼう）についての理解の不足がもたらした錯覚であり、前述したように、様々な差異の存在は、それが差異であるというだけでは、決定的な実体化はもたらされず、あくまでも状況的に規定されるだけの存在でしかないのである。⁴⁾

だが無数に存在する差異のうち、特定のそれが選択され、その重要性が他の差異を圧倒して膨らんでいく、つまりアクティベートされた差異が別の差異へと転化され、それが他の様々な差異を圧倒して問題化されていくためには、そのアクティベーションが持続化され、一つのアクティベーションが次のそれへと連続的に転化されていく円環的な連鎖が形成されている必要がある。そうでなければ、例えばゴミ処理工場に関する対立も一時的なものとして終わり、工場を移転する、あるいは都が介入するといったかたちで、その対立がエスカレートしないよう

4) ニーチェ流に言えば、結果と目的の混同である。

な手続きがあれば、いわば差異のアクティベーションはあくまで一時的なものとして終わる筈である。前述したX区/Y区の関係では、その対立の生成が中断されないような、偶発的な連鎖が続くケースを描いてみた。つまり一つの対立が転化され、更にそれが別の対立を生み、その一連の衝突が、全て一つの差異の構造に集中化されるという、円環的な過程が存在する事が必要なのである。これをベートソン流に自己触媒的(*autocatalytic*) [Bateson 1972(1987)] とか、あるいはアイゲンの言うハイパーサイクル [Eigen and Winkler 1975(1981); Eigen and Schuster 1979] という概念で表現してみたい。アイゲンのそれは、生化学的反応の連鎖として、一つの触媒による化学反応が次の反応の触媒となり、それが更に次の化学反応を引き起こすという形で、最終的にはそれらの反応の連鎖が一つの円環のように閉じたサイクルを作る状態を示している。こうした円環的な触媒反応が成立すると、差異のアクティベーションは、いわば持続的な過程になる。X区/Y区の関係で示したかったのは、最初はゴミ処理工場に端を発する対立が、区長間の対立、そして区役所での騒乱事件や、更には学校でのいじめといった形で、次々へと連鎖的な反応を示していく過程である。こうした円環のシステムが成立すると、変化はいわば加速的になる。つまりある状態で安定するというよりは、対立が次の対立を生むという形でエスカレートするようになり、安定解に落ちつくフィードバックではなく、むしろ変化が加速化するフィードフォワードのプロセスになる [Maruyama 1963]。人類学者が世界各地でしばしば目撃しているのは、こうしたハイパーサイクル的な過程が起動しはじめた、その現場である事が多い。つまりかつてなら何の問題もなく共存していた人々の間で、急速にある種の対立の構図が形成されていく過程なのである。

ここで重要なのは、この円環的な過程によって、ある特定の差異が、そしてその差異だけがアクティベートされつづけるという点である。つまりゴミ処理工場、区役所、学校、といった、異なる領域での出来事が、あたかも一つの差異を巡って展開するような、ある種の虚構の過程である。そしてその当事者にとっては、このように持続的にアクティベートされた差異は、既に他の差異とは異なる重要性を持つように見える。ここで初めてエスニック・アイデンティティなるものは、単に状況毎の自己規定の不確実性から、そうした個々の状況を越えた、超状況的な何かの存在という、一種の錯覚を形成する事になる。これはある特定の差異が一つの文脈から遊離し、多文脈に同時にその影響を与えるプロセスである。多くの人類学者が「伝統の創造」 [Hobsbawm and Ranger 1983] といって騒いでいるのは、このハイパーサイクルの形成と、それによる特定の差異の持続的なアクティベーションによる、いわば差異の脱文脈化の過程である。そもそも差異とは関係性の別の名であり、アイデンティティとは、その差異の知覚によって事後的に自覚されるものである。だがこうした特定差異の抽出とアクティベーションの持続は、その事自体によって、そこになにか脱文脈的な、永続的なものがあるという錯覚を形成する。例えばX区とY区の間にある微細な差異は、それが問題の焦点であるが如く

に感じられ、そうである以上、X区とY区の間には「もともと何か本質的な差異がある、その差異を構成する実体としてのX区（あるいはY区）性」のようなものが求められるようになる。X区/Y区の場合は、それが区旗といったシンボルであったが、これはそうした脱文脈化の最も乏しい実例であろう。実際は、ここで差異の脱文脈化に運用されるものは何でもよろしい。それは儀礼でも、服装でも、あるいはちょっとした方言であってもいい。その過程を進める為に、新たな方言が作りだされたり、途絶えていた儀礼を復活させたり、あるいは全く新しい儀式を作りだしてもかまわない。問題は同じ事で、ある状況においてしか知覚される事の無かった差異が、その状況を越えて永続化される過程の一つの例証に過ぎないのである。X区/Y区では、区のシンボルバッチを日常的に使用したり、祭りの最中に区旗が飾られるといった姿を描いているが、差異の脱文脈化とは、このようにシステムの諸領域において、ある特性が持続的に使用される過程を示している。

こうした過程を経て脱文脈化された民族のシステムは、妙な実在性を持つ事になる。それはアイデンティティのレベルでは、ある差異によって事後的に知覚される筈の自らの特性が、その文脈を越えて、継続的に意識される過程である。と同時に、人工的に形成された（お好みなら「創造された」）特性というのは、儀礼やら言語やら、あるいはその他様々の社会的に媒介されたシンボルによって、一種他者にもハッキリと知覚できるような特性を持つことになる。儀礼などは、そうした知覚的特性の為に（しかもこうしたハイパーサイクルに巻き込まれる前は、それはただルーティン的にこなされる為だけのものだった為に）、こうした人工的な形成の過程をもってこの対象となる。しばしば儀礼が民族のアイデンティティの象徴のように使われるのはこうした理由による。

このように一旦起動しはじめたハイパーサイクルと、それに伴う差異の脱文脈化の過程がどのようなシナリオを描くかは、それぞれの状況によって一様ではないが、一旦起動したこうしたプロセスによって半ば偶発的に抽出された一連の特性は、一種の本質的なものという認識をえるようになる。この本質化の過程は更に拡大して、その起源を探るという形で展開する。それは基本的には二種類の可能性があり、一つは歴史的なレトリックであり、もう一つは生物学的なそれである。歴史的なそれは、例えば対立が決定的になった二つの集団の間の差異を理論づける為に歴史的な起源をもってきて説明する事であり、他方はそのルーツを何か生物学的なそれに還元して説明しようとするものである。この二つは現実にはしばしば分かちがたく絡みついているが、例えばX区/Y区のケース等では、せいぜいそれは歴史的な由緒を辿って自らのアイデンティティの足しにする程度で罪が軽い。歴史的には、こうした環元的説明は、ある特定の集団が生物学的に劣っていると、肌の色という生物学的な特性にもとづいて行なわれる事はしばしばあった。厄介なのは、差異のハイパーサイクルによって疑似本質化されたある種の差異は、こういった歴史—生物学的な理論化によって、その疑似本質性を益々深めると

いう事態であり、そうなると仮にこのハイパーサイクルが終焉し、紛争が停滞化したとしても、それは歴史的な記憶として、あるいは疑似生物学的理論として、残る可能性があるという点である。

ここでのポイントは、一旦起動したハイパーサイクルは、それが終焉しても、ある種の歴史的な記憶を残すという点である。言い換えれば、民族という概念には、それに関連した集合的な記憶という問題がついてまわるという点である。その点が、例えば日本に新しくやって来た外国人移民達と、例えば旧ユーゴスラビアの事例が異なる所以である。旧ユーゴのようなケースでは、既に歴史的に何度ものこうした差異のハイパーサイクルの過程を経ていると考える事ができる。そして繰り返し疑似本質化を行って、それが鎮静化し、再び新たなハイパーサイクルが起動しはじめると、そうした集合的な記憶があつというまに総動員される事になる。既に疑似本質化が何度も学習されている為に、再びサイクルがスタートすると、それを加速する要因には事欠かないのである。人が一般に民族問題と呼ぶのは、こうしたハイパーサイクルの起動の歴史的な痕跡である。

V 終わりに

民族とは、当初に述べたようにある動的な過程の特定の段階の切断面を示したものである。だからその特性はこうしたハイパーサイクルのどの段階に属し、更にそれが歴史的にどのような経過を経て現在に至っているかで、極めて異なった形態を示しうるし、その事が民族という概念にまつわる様々な意見の不統一と混乱を招いてきた。その中でも特に、この概念が客観的な定義と、主観的なそれに理論的に分岐しがちであるという点についてははじめに示した通りである。だが民族というものが、結局の所様々な差異の中の特定の差異がアクティベートされ、ハイパーサイクルの中に巻き込まれる過程によって生じるものであると考えれば、その理論的分岐とは、この過程の様々な段階、あるいはその中で生じる様々な側面の一つだけを取り出して、それから一般化しようとした事による理論的誤謬であるという事が出来る。どの断面をとるかによって、民族は、ただぼんやりとした主観的な感覚に還元される事もあれば、あるいは極めて本質的な実体感をもってたちあられる事もある。その何方も間違いではないが、事態の一面を示しているに過ぎない。

最後に付け加えれば、この論文で略述した過程は、歴史のどんな時点でも起こりうるという意味で、超歴史的なものである。だから地域的には、こういった過程が反復的に存在したような所も存在しうる。だが現在での特性というのには、そうした差異のアクティベーションの発端を作るような、主として経済に起因するような原因が、資本主義のグローバル化によって拡大し、こうしたサイクルが起動し易い条件が地球規模に展開しているという点にある。更にここ

では詳しく述べなかったが、現代社会に特徴的な様々な社会システムの機能的分化によって、このサイクルが稼働する領域が多角化しつつあるという点も、特に先進国等でこうした民族の問題を考える時には重要なポイントとなってくる。だから一方で、直接的な軍事衝突に発達するような過程も存在すると同時に、社会によっては、この問題は、政治、経済、教育、さらにはメディアといった諸システムでそれぞれ固有の形でたちあられるようになる。これがシステム間での差異の写像である。その意味では、同じ民族という言葉を使いつつも、例えばアフリカでの民族紛争と、アメリカにおけるそれではその現れ方が異なってくる。それは一つはシステムの分化の差であり、X区/Y区のケースもそうした社会的分化を前提としている為に、問題の表出のあり方はシステム毎に分散している。だが地域によってはそれが軍事的な衝突に発展したりもしている。その意味では、社会システムの分化の度合いによるこうしたハイパーサイクルの起動の形式については、より突っ込んだ議論が必要であろう。だがいずれにせよ、どんなに単純でも見取り図がなければ、我々は社会という複雑性の海を航海する事は出来ない。民族といった概念は、その意味では混乱を収束するというよりはむしろそれを助長するような概念ではある。だがそうした混乱の中に多少なりとも筋立てを見いだして、航海の役に立てようとしたのがここでの試みなのである。

参 考 文 献

- Banks, Marcus. 1996. *Ethnicity: Anthropological Constructions*. London: Routledge.
- Barth, Frederik, ed. 1969. *Ethnic Groups and Boundaries*. New York: Little Brown.
- Bateson, Gregory. 1972. *Steps to an Ecology of Mind*. New York: Harper & Row Publishers. (ベイトソン, グレゴリー. 1987. 『精神の生態学 上・下』佐藤良明他(訳). 思索社.)
- Caley, M.T.; and Sawada, Daiyo, eds. 1994. *Mindscapes: The Epistemology of Magoroh Maruyama*. New York: Gordon and Beach.
- Eigen, Manfred; and Schuster, P. 1979. *The Hypercycle: A Principle of Natural Self-organization*. Berlin: Springer.
- Eigen, Manfred; and Winkler, Ruthild. 1975. *Das Spiel: Naturgesetze steuern den Zufall*. München: Piper & Co. Verlag. (アイゲン, マンフレート; ヴィンクラー, ルティルド. 1981. 『自然と遊戯・偶然を支配する自然法則』寺本英他(訳)東京化学同人.)
- Erickson, Erik. 1959. *Identity and the Life Cycle: Selected Papers*. New York: International Universities Press.
- _____. 1963. *Childhood and Society*. New York: Norton.
- 福島真人(編). 1995. 『身体の構築学』ひつじ書房.
- Glaser, Nathan; and Moynihan, Daniel P., eds. 1975. *Ethnicity: Theory and Experience*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Hall, Stuart, et al., eds. 1984. *On Ideology*. London: Hutchinson.
- Harker, Richard; Mahar, Cheleen; and Wilkes, Chris, eds. 1990. *An Introduction to the Work of Pierre Bourdieu: The Practice of Theory*. London: The MacMillan Press.
- Harries-Jones, Peter. 1995. *A Recursive Vision: Ecological Understanding and Gregory Bateson*. Toronto: University of Toronto Press.
- Hobsbawm, Eric; and Ranger, Terence. 1983. *The Invention of Tradition*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Kneer, Georg ; and Nassehi, Armin. 1993. *Niklas Luhmanns Theorie Sozialer Systeme*. München: Wilhelm Fink Verlag. (クニール、ゲオルグ；ナセヒ、アルミン. 1995. 『ルーマン 社会システム理論』館野受男他(訳)新泉社.)
- Lukačs, György. 1971. *History and Class Consciousness: Studies in Marxist Dialectics*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Luhmann, Niklas. 1984. *Soziale Systeme: Grundriss einer allgemeinen Theorie*. Frankfurt am Mein: Suhrkamp Verlag. (ルーマン、ニクラス. 1993. 『社会システム理論 上・下』佐藤勉(監訳). 恒星社厚生閣.)
- _____. 1990. *Essays on Self-reference*. New York: Columbia University Press. (ルーマン、ニクラス. 1996. 『自己言及性について』土方透他(訳)国文社.)
- Maruyama, Magoroh. 1963. The Second Cybernetics: Deviation-amplifying Mutual Causal Process. *American Scientist* 51.
- Moerman, Michael. 1965. Ethnic Identification in a Complex Civilization: Who Are the Lue? *American Anthropologist* 67:1215-1230.
- _____. 1988. *Talking Culture: Ethnography and Conversation Analysis*. Pennsylvania: Pennsylvania University Press.
- Wilkes, Chris. 1990. Bourdieu's Class. In Harker *et al.* [1990].
- Žižek, Slavoj, ed. 1994. *Mapping Ideology*. London: Verso.